令和
諏訪形令和かわら版

第６号
諏訪形自治会
会長:稲垣敦史

空き家環境美化作業

ゴミと樹木に覆われ廃屋化した空き家

四月三日(土)～四日(日)、廃屋化した空き家の環境美化作業が、諏訪形自治会「まちづくり協議会」(宮下省二会長)の呼びかけによるボランティア活動によって実施されました。この空き家は、かねてより、繋茂樹木による交通障害、異臭等による近隣への悪影響、劣化した家屋の倒壊の危険が指摘され、緊急の懸案となっていました。身寄りのないまま施設で逝去された元居住者の縁者の方が、今回たまたま判明し、その了解が得られたため、ようやく作業に着手することができました。

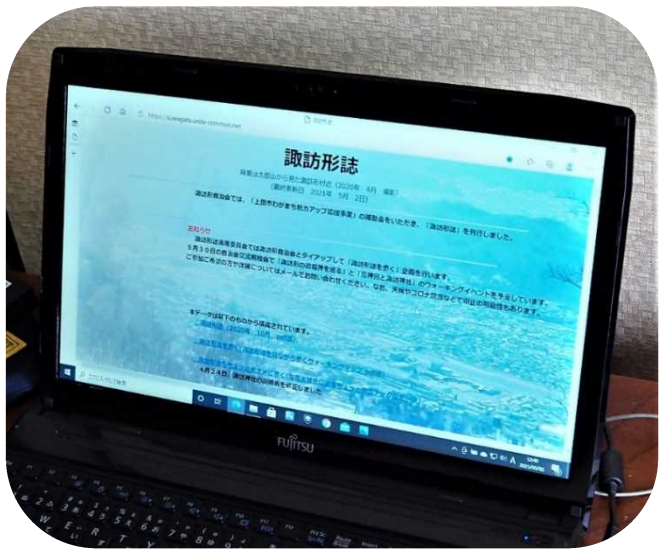
三日(土)には九名、四日(日)には二十三名の参加があり、チェーンソーによる樹木の伐採と撤去、手作業による散乱するゴミの処分など、大変な作業となりました。

処分したゴミの量は、ゴミ袋一一八袋分、伐採した樹木は、軽トラック二十一台分、その他資源ゴミは金属類三台分、木質類二台分に達しました。家屋内部は手つかずのままですが、状況は、かなり改善されました。ボランティアの皆様のご尽力に深く感謝申し上げます。

空き家問題は、少子化対応や地域創生が日本社会の課題となるなか、今後の諏訪形自治会にとっても大きな課題となることが予想されます。荒廃空き家の処理は、原則的には所有者およびその相続者・縁者が責任を負いますが、その方々の対応が難しい場合、市との協議により自治会も対応することになります。基本は、ケースバイケースとなるでしょうが、今回の事例は、今後の参考として貴重な経験になるものと考えます。区民の皆様のご理解ご協力をお願い申し上げる次第です。

ゴミと樹木の撤去が終わった空き家

『諏訪形誌』Web版・DVD版更新中



Web版『諏訪形誌』は、残念ながら検索エンジンに引っ掛かりません。 アドレスは
https://suwagata.ueda-common.net/
是非、「お気に入り」に登録してください。

昨年刊行された『諏訪形誌』ですが、他地域からの注文も複数あり、大変好評です。「諏訪形誌活用委員会」(柳澤公一委員長)も組織され、『諏訪形誌』による地域づくりを検討しています。

その一環として、『諏訪形誌』がインターネット上に公開され(Web版)、DVD版も作られました。『諏訪形誌』に掲載できなかった写真や貴重な動画を観ることもできます。さらには興味深い新しい話題も追加され、順次更新中です。

そのような追加記事から、興味深いものを二つ紹介します。いずれも活用委員で、自治会長でもある稲垣さんが現地に足を運んで書いたものです。

○徳本上人と名号碑

―上田市内に残る徳本上人の足跡を訪ねる―

紀州の念仏僧徳本上人は、江戸時代後期、念仏を唱えて全国各地を廻り、一大ブームを引き起こしました。それを記念して、各地に「南無阿弥陀仏」と刻した名号碑が建立されました。諏訪形に残る通称「カンカン石」もその一つです。上田市には、「カンカン石」を含めて六つの名号碑が残されています。これらについて、写真やイラストや地図で詳しく紹介されていますので、ウォーキングやランニングのついでに、訪ねてみてはいかがでしょう。

○北越戦争と諏訪形の人たち

―「諏訪形誌を歩く」外伝―

戊辰戦争の激戦の一つ、北越戦争が終了した後、引き上げる新政府軍の輸送労役に、諏訪形の人々が駆り出されました。引き上げルートは「北国脇往還」という街道で、今でこそ高速長野道や篠ノ井線が近くを通過していますが、山あり、谷あり峠ありの大変な難ルートでした。諏訪形の人々が担当したのは、稲荷山宿～麻績宿～青柳宿で、稲垣さんは、実際にこのルートを自分の足で歩き、当時の諏訪形の人たちが、どうやってここまで来たかを推理しています。大変興味深い記事です。ぜひお読みください。

大型生ごみ処理機のご利用を！

公民館南駐車場の一角に「大型生ごみ処理機」が設置され、約四十名の皆さんが登録しています。家庭から出る生ごみを投入すると有機肥料に生まれ変わり、会員は、無料で持ち帰ることができます。家庭の生ごみを減らすためにも、さらに多くの皆さんの参加をお待ちしています。

利用については、大型生ごみ処理機運営管理委員長の窪田和人さん(本年度自治会総務部長 090-7005-9991)にお問い合わせください。

多目的広場のご利用を！

公民館南駐車場に隣接して多目的広場があります。全面に人工芝がはってあり、広場の隅には小さな砂場もあります。冬の間は閉鎖していましたが暖かくなってきたので開放しました。基本的には、どなたでも自由に利用できます。フェンス入口の留め具が少しきついですが、鍵は掛かっていません。小さな子どもさんの遊び場や、マレットゴルフの練習場などとして、ぜひご利用ください。

ちょっとナナメに

『諏訪形誌』を歩く(二)

副自治会長　窪田善雄

諏訪形のミホトケたち(前編)

仏教のあゆみ

前回は、神社巡りでしたが、今回は、諏訪形の仏像巡りを企画しました。しかし、仏像＝ミホトケというのもなかなか奥が深く、きちんと「仏教」を理解していないと本当のミホトケ巡りはできないと思うのです。

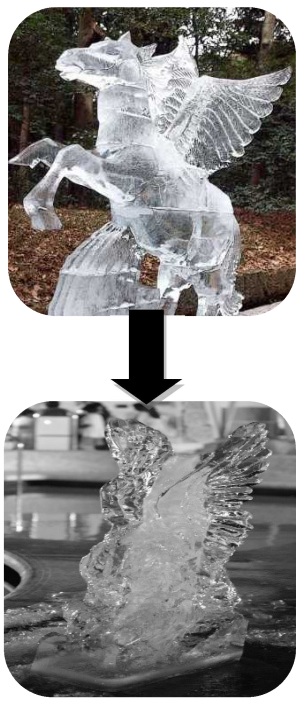
そんなわけで、今回は「前編　仏教のあゆみ」と題してまず仏教そのものについて語り、ミホトケ巡り準備編とさせていただきます。少々煩わしいのですが、しばらくお付き合いください。

○釈迦の仏教

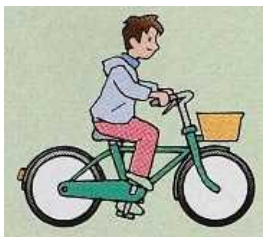
仏教の祖、釈迦(本名ガウタマ・シッダールタ)は、二千数百年前、今のネパールの辺りにあった「カピラ」という小国の王族出身で、実在の人物であったことは、ほぼ間違いありません。彼は、紆余曲折の修行の末に忽然と究極の真理を悟りました。

「人生は苦しみに満ちているが、それは、事物への執着心(＝煩悩)に起因する。しかし、すべての事物は、必ず変化してしまうまぼろしのように実体のないものであり、このようなものに執着しても何も得られるはずはなく、必ず苦しむことになる。この真理を悟れば、人は無意味な執着心から解放され本当の幸せに到達できるのだ！・・・・」

おそらく釈迦は、すべての存在を氷の彫刻のようにとらえたのでしょう。変化のスピードは違うかもしれませんが、すべての存在は遅かれ速かれ、必ず変化します。だから、「変化するゆえ実体がない」という本質は、すべての存在で、氷の彫刻と同じだというのです。「そんなものに執着してもバカをみるだけだよ。」簡単に言えば、そういうことです。



釈迦の教えは、多くの人々の心をとらえ、各地に仏教教団が形成されました。そのなかで信者たちは、戒律を守り、厳しい修行を通じて、「悟り＝救い」を目指しました。しかし、それはあくまで自分自身を救うためでした。初期の仏教は、利己的なものだったのです。たとえていうなら、信者は、自転車を必死に漕いで「悟り＝救い」の世界に向かったのです。



○仏教の大変革
(大乗仏教の成立)

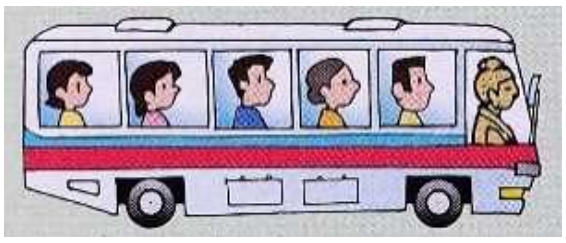
釈迦の時代からほぼ数百年が経過した紀元前後の頃、仏教の世界で、これまでの仏教の在り方を反省する動きが起こりました。日々の生活に忙しい一般の人々にとって、救いを求めて特別な修行に従事することは事実上不可能です。そのような一般大衆を放っておいて、自分自身の「悟り」ばかりにかまけていてよいのだろうか。こう考えた人々は、これまでの仏教を、「小乗仏教＝小さな乗物の仏教」(まさに自転車です。)と批判し、新たな仏教の創造に乗り出しました。仏教史上最大の変革の始まりです。

一般大衆にとって、日々の修行など不可能ですが、釈迦のような偉大な修行者に救いを求めて祈願することならできます。釈迦は、数百年前に死亡した実在の人物ですが、そうした現実性は無視され、釈迦は神格化されて「悟り＝救い」を祈願する対象となっていきました。こうして生まれた新しい仏教を「大乗仏教＝大きな乗物の仏教」と称しました。大勢の一般大衆を一気に救いに誘う大きな乗物という発想です。釈迦のオリジナル仏教を自転車に例えましたが、「大乗仏教」は、バスにたとえることができると思います。

○宗教となった仏教

少々ややこしい話になるのですが、そもそも宗教とは、スーパーな超越的存在を想定し、それを「神」などと呼んで祈願したり崇拝したりする営みのことです。しかし、先にみた釈迦のオリジナル仏教にそうした要素は見当たりません。それは、生身の人間である釈迦が説いた生き方の教えであり、釈迦の教えは、本来宗教ではなかったとみるべきです。

これに対して大乗仏教は、釈迦を超越的存在とみなして崇拝し、釈迦への信仰によって救いを得ようとするわけですから、それはまさに宗教としての営みです。そして私たち日本人が馴染んでいるのは、こうした大乗仏教です。



○「ミホトケ」の増殖

大乗仏教で信仰対象となった超越的存在を「ミホトケ」と呼ぶことにします。もちろんその代表格は釈迦ですが、釈迦以外にも多くのミホトケがいるはずだという発想が生まれました。釈迦は、修行の末に究極の真理に覚醒してミホトケになったとすれば、同じような修行者は、他にもたくさんいたはずだ、という発想です。こうして「ミホトケ」の増殖が始まりました。多くのゴーストライターたちが、大乗仏教に見合った新しい経典を次々に書き上げました。それがいわゆる「お経」ですが、そのなかで多くのミホトケが創り出されていったのです。

ミホトケには、主に二つのタイプがありました。一つは、究極の真理に到達し、完全な悟りに到達したミホトケたちです。これらのミホトケは、「如来」と呼ばれます。もう一つは、「如来」に仕えて修行を続け、あと少しで悟りに到達するミホトケたちです。これらのミホトケは、「菩薩」と呼ばれます。

こうして「釈迦如来」を含めたさまざまな如来が創造されました。有名どころをあげれば「阿弥陀如来」、「薬師如来」、「大日如来」などになります。

そして、これらの如来に仕えるさまざまな菩薩が創造されました。有名どころをあげれば「観音菩薩」「勢至菩薩」「文殊菩薩」「普賢菩薩」「弥勒菩薩」「虚空蔵菩薩」「地蔵菩薩」「日光菩薩」「月光菩薩」などになります。

大乗仏教をバスにたとえましたが、如来は、バス会社の社長のような存在です。すると菩薩は、その社員ということになるでしょう。最初は、お釈迦さまの会社一つから始まったバス路線ですが、次々新しいバス会社が設立され、バス路線は広がっていきました。このようにして多数のミホトケから成り立つ大乗仏教の世界が形成されていったのです。

生み出されたミホトケは、祈願や礼拝の対象になりますから、その実感を得るためには、目に見える「モノ」、つまり仏像にするのが、もっとも有効です。こうしてミホトケ＝仏像が次々に生み出されることになりました。そうしたミホトケ＝仏像のいくつかを、まずは日本の国宝のなかから見ておきましょう。

阿弥陀如来(三千院)
・京都市大原
・平安時代(藤原時代)
　右脇侍：観音菩薩
　左脇侍：勢至菩薩

釈迦如来(法隆寺)
・奈良県斑鳩町
・飛鳥時代：日本最古級の仏。聖徳太子の姿を写したともいわれる。

○諏訪形のミホトケ巡りへ

以上で、一応の準備はできました。諏訪形には、どんなミホトケがおいでなのでしょうか。というわけで、次回は、いよいよ諏訪形のミホトケ巡りとなります。引き続きお読みいただければ幸いです。　(了)

十一面千手観音
(唐招提寺)奈良市
・天平時代：11の顔と千本の手、「化け物」のような観音菩薩

弥勒菩薩(広隆寺)
・京都市太秦
・飛鳥時代：56億7000万年後に如来になるとされる。

地蔵菩薩
(法隆寺)
・平安時代前期
地蔵菩薩としては唯一の国宝

大日如来(円成寺)
・奈良市
・平安時代末：運慶作
密教の本尊、忍者のような「智拳印」が特徴

薬師如来(新薬師寺)
・奈良市
・平安時代初期：左手に薬壺を持つ。十二神将に囲まれている。

編集後記

上田市でも、コロナワクチン接種が始まりました。母親の接種予約を何とか取ることができました。感染収束を祈るばかりです。

編集責任(副自治会長　窪田善雄)